

「善意」が引き起こす結果には2種類ある。「本当にためになる」ものと「要らぬ心配・余計なお世話」だ。もちろん善意は人の心の真実から湧きいずる感情なので美しいものであるが、そこに現れる結果は判断力に左右される。判断力とは脳が今まで蓄えた知識と経験を元にして瞬時に結果を導き出す想像力だ。その不足によって「良い」ものから生まれたはずなのに「悪い」結果をもたらしてしまうことが時々ある。ではその善行が悪行に変じてしまう「判断力不足」の原因はどこにあるのだろうか？それはその人の「頭の中の世界」が狭いからではないだろうか？「自分がこうだと考えること」「自分がよいと思うこと」は必ずしも他人のためになるとは限らない。人間は一人一人違う。生きる環境がそれぞれ違う。類似していても物事の状況は一つ一つ違う。それらを認識するかしないかが善意のもたらす結果を分けてしまう。もちろん他人の経験談は参考になる。しかしそれが役立つかどうかは微妙である。したがって善意がお節介に変じてしまう人の間違いは「(当人でも第三者でもなく)自分がその問題の結論を出さなければならない」という自己過信に基づいた行いにあると思う。

「自分はこれで今までうまくやってきた」という自負に果たして時下の条件は付帯しているだろうか？もし欠けているとすればその人の頭の中の世界は狭い。もしその人が「私の場合はこれでうまくいったが、あなたの場合はどうだろうか？」「この時はこういう対処方法があったが、この場合はどうだろうか？」という考えに到達することができたら、その人の世界は広がるだろう。常々の考えは瞬時の行動に現れるので「状況を見定める力」を養うことは大切だ。「善いことをした」という自己満足は、他人に喜んでもらえて初めて生まれるのであって、善行と思うことを行なった時点で自分だけに生まれるものではない。翻して言えば「ためになる結果」を導き出す人には「自惚れ」や「見返る悦びへの期待」がなく「思いがけない喜び」があるだけである。

さて、今度は「悪意」を考えてみよう。それは「善意」と同様に瞬時に生まれて即行に結びつくものと、延々とくすぶり積み重なって計画的行動を引き起こすものがある。それらが「善意」と違うところは、知識の蓄積や経験に基づく判断から出るものではなく「欲望」という感情から生まれるところである。これは自己過信ではなく、とことん自分の自信のなさから生まれる。他人を傷つけなければ生き残れないというあがきである。「自分には価値がない」と宣伝しているようなものである。その「価値のなさ」をお金と権力で埋められると思っている傲慢である。比較的裕福な家庭で問題が起こるのはその権力を有するからであろうと思う。それは「自分には金も権力もあるから大切に扱われて当然」という勘違いである。また「金と権力」に見合う生活をしなければならぬという強迫観念である。本物の金持ちや実力者はあがかない。また別に「ひがみ」から発する欲望も存在する。自分自身の努力なしに「持っている者」を羨む。そこには「楽をして多くを手に入れたい」という無意識の羨望がある。場合によっては「自分は能力があるのに、金や権力がないから評価されない」という自惚れもある。それは勘違いである。本当に能力のある人は性急な評価を求めず着々と努力する。世間に見る目がなければ見る目のあるところへ移動する勇気と行動力を持つ。結局「悪意」を放つ人は狭い世界で欲望にがんじがらめになっている人である。

地球の水辺に「考える葦」変種を増殖させない環境管理は必要だろう。(2012.8.25)